

歩歩歩会



「さんぽかい」と読みます。由来は山々をゆっくり楽しみながら歩く「散歩」から命名されました。当時の社会教育課（現地域教育振興課）に土曜サロンという講座があり、修了時の懇親会で受講生が集まり、五つの同好会が生まれました。「歩歩歩会」はその一つです。

振り返れば、平成10年（1998年）4月に箕面・勝尾寺口の大鳥居から外院尾根を歩き、桜の咲き乱れる勝尾寺園地で初会合をしたのが始まりです。発足時は男性13人の集まりでしたが、現在は男女がほぼ同数で、合わせて約40人に成長しました。

歩く山は、茨木市の武士自然歩道や摂津峡などの近場から、六甲山系、京都北山・東山、金剛山系など多少硬軟を取り混ぜています。例会は月に1回で、日帰りできる山や溪谷を歩き続けています。難しく言えば、自然に親しみ、心身の健康と相互の親睦を図ることを目的に発足したもので、夫婦で参加する方もいて、和やかに活動しています。

行き先などは会員の希望で決めています。毎月の参加者はだいたい20人前後になり、ちょうどまとまりやすい人数になります。

年齢は50歳代、60歳代がほとんどですが、最近ホームページも設置し、不参加の会員もスナップ写真で行った気分にもなり、写真と時間をタイムリーに紹介しますので、ほかのグループの資料にも一役買っていると思います。

これからも、全会員がいつまでも元気で例会に参加できればと思っています。

連絡先 矢野 大輔 627-6164
ホームページアドレス
<http://issyhan.hp.infoseek.co.jp>

大阪ミントJ.C



「大阪ミントJ.C（ジョギング・サークル）」は、ジョギング・マラソンを愛する人たちの集まりです。毎週日曜日、午前8時から中央公園をスタートし、桜通り、川端通りを往復する約11kmのランニングをしています。

サークルのメンバーは総勢57人。年齢も20歳代から60歳代まで幅広く、初心者から大ベテランまで、女性も数多い楽しいサークルです。

メンバーは、3km、5kmの比較的短い距離からフルマラソン（42.195km）や100km以上のウルトラマラソンまで、各地の大会・レースに参加しています。またホノルルマラソンや北京マラソンなど海外の大会に行く人もあります。

走った後の懇親会を楽しみに練習に励む人も多く、大会終了後の打ち上げは恒例行事となっています。また春の花見、夏の合宿、山登り、バーベキュー、テニス大会など季節ごとのイベントもあり、マラソン以外の楽しみもいっぱいあります。

設立は平成4年（1992年）。ランニング好きの2、3人が桜通りを走る朝の練習を始めたのがきっかけとなり結成されました。「ミント」の名前は、当時メンバーがよく集まった喫茶店の名前に由来しています。

手軽にダイエットを始めたい方、気持ちのいい汗をかきたい方、「ミント」の朝の練習に一度参加してみませんか。また視覚障害がある方で一緒に走ってみたい方は、伴走などのサポートをしますので、ぜひお越しください。

連絡先 石井 美信 622-3552
ホームページアドレス
<http://homepage2.nifty.com/mintjc/index3.html>
メールアドレス
mintjc@mbh.nifty.com

市民インタビュー



第21回

茨木市民の中からいきいき生活の達人を探し出し、紹介するコーナーです。話から見てくるその豊かな人生に、きっとあなたも勇気づけられることでしょう。

石に魚の絵を描く博物画家
こむら かずや
小村 一也さん

琵琶湖・淀川水系にすむ淡水魚の姿を石に描き続ける小村一也さん。自然の石をキャンパスに、水面下の魚の情景を原寸大にリアルに表現する。小村さんに『石に棲む魚』の世界を語っていただきました。

石に魚の絵を描くようになったきっかけは何ですか。

長女は1歳半で心臓の手術を受けてから、見違えるように元気になり、外で遊ぶのが好きな子になりました。ある日河川敷を歩いていると、長女が石を拾ってきて、「石に魚を描いて」と言いました。この一言が私の転機となり、それから本格的に『石に棲む魚』の創作活動に入りました。やっとやりたいことに出会えたという思いでした。

どのような方法で描くのですか。

石は基本的には汚れを拭き取るだけでそのまま使います。上流にすむ魚は上流の石に、下流にすむ魚は下流の石に描きます。親しい石屋さんを探してもらった石を切って使うこともあります。絵の具はアクリル絵の具を使い、重ね塗りをします。細かい所を描く筆はネールアート用を使います。下絵なしで描くのですが、描き慣れた魚だと45分から半日で描きます。大事なことは正確に描くということです。ウロコの数や形などもうそのないようにしています。石に描く魚の大きさも原寸大です。しかし正確さだけでなく、生き生きとした動きを出すように工夫して描いています。そのために、目には少し「表情」を入れています。

琵琶湖・淀川水系の淡水魚を題材にしているのはなぜですか。

身近にある自然を、少しでも知ってもらいたいという気持ちです。子どもの時から茨木に住んでいて、安威川や茨木川は私にとってはなじみ深い場所でした。川と水辺と魚は子どもの頃からの親しい仲間です。安威川上流には希少種も生息しており、また琵琶湖やほかの淀川水系の川にも固有種がいます。それらの魚を絵にして残しておきたいと思ったのです。

河川環境についてどう思いますか。

人と自然との折り合いは難しい問題です。世の中の流れの中で、どうしようもない現実があります。しかし近くの

川を見ていると、行政もよく頑張っているなど感じています。訪れる人たちのマナーもよくなっているようです。環境は油断するとすぐに悪化します。生き物の生態をよく知って、人との共生ができる環境が作れるといいですね。

絵から何を伝えたいですか。

表情がある生き生きとした絵を描き、子どもが自然に興味を持ち、そこから親子のコミュニケーションが生まれたらいいなと思っています。私は身近なもの、見過ごされているものを描きたいと常々思っています。そうすると必然的に自分の住んでいる街に目を向けることになります。この絵から自分たちの身近な自然を感じ取ってもらえればうれしいです。

今後の目標は何ですか。また小村さんにとって「生涯学習」とは何ですか。

生きている間に、目の前にある自然をできるだけ多く描き、それらを次世代に残すことができたらと願っています。私の一生をかけて、ありとあらゆる自然から多くのことを学ぶ。それが私の「生涯学習」です。



担当：崎間 宮原

わたしの時間 第15回

「毎日仕事に追われて忙しく、旅行に行く余裕もない」「音楽を聴く時間もない」と人は言う。現役の間は仕事に励み、家庭を大切にすることは当たり前である。しかし、自分の時間が全く作れないはずはないと思う。目標を定めてプランを立てれば仕事の効率もよく、結構自分の時間が作られて規則正しい日々が送れるように思う。

私は五十年以上もアメリカ南部のアラバマ州アンソニー地方の伝承音楽である「ブルーグラス・ミュージック」を愛し続けてきたが、忙しい時ほど家に帰ってからそれを聴くようにしてきた。パンジョーやギターやマンドリンが刻む心地よいリズムと一味違った哀愁漂うアイリッシュ音楽のフィドル（ヴァイオリン）の音色が、疲れた私を癒してくれた。

仕事と趣味のバランスを取ってうまく時間の使い方ができるのは、人生においてとても大事なことと思う。「趣味」と「道楽」を混同する人もいるが、無意味な「道楽」と「趣味」は全く異なる。人間関係を豊かにして新たな文化を創造する「趣味」は、生涯学習の原点と言える。私は今それを実感しながら「（人との）輪」（交流の）話」「（心の）和」を噛みしめて日々を過ごしている。

東實 文男